**5章　地域通貨の可能性**

1. **ビジネスとボランティアの境界がなくなる**

　ビジネス：お金を儲けることを目的に行われる営利的で利己的な行為(市場における公式的な経済活動)。

　ボランティア：一切の対価を求めない無償で利他的な活動(非市場における非公式な活動)。

→利己的行為と利他的行為、有償行為と無償行為、営利活動と非営利活動といった対立を乗り越える。

※人間の持っている利己と利他を認めた上で対立しない仕組みを考えることを意味し、決してこの二面性を否定することではない。

　『では、何を無くすべきなのか』

→営利行動に含まれる貪欲さや無償行為に含まれる残酷さ。

→利己が行き過ぎれば人々を不幸や犠牲にしてしまう、利他が行き過ぎれば相手を自分に逆らえない立場に追いやってしまうから。

→活動全てを利己性と利他性が含まれる互酬的な交換行為にするべき。

→**地域通貨**を使用して非営利的な有償活動にする。

　『地域通貨を使用する』

→無償行為を有償行為に、営利活動を非営利活動に転換可能。

→値域通貨の創り出す市場では、受け手によって主体的に価値を評価できるから。

1. **新しいコミュニティが生まれる**

『地域通貨は**コミュニティ通貨**とも言われる』

・ここでいうコミュニティとは、人々が一定の空間に生活･居住し相手の顔が見えることを前提。またこれを**リアル・コミュニティと**呼び、さらにリアル・コミュニティで流通する地域通貨は狭義の地域通貨である。

　・仮に地域通貨がインターネット上で電子マネーを媒体として利用されるならば、特定区域に限定される必要はなく世界中の至る所で利用される。このようなコミュニティは**バーチャル・コミュニティ**であり、そこでは関心や意見などによって個人が相互に結びつけられている。また、そこで流通する地域通貨を**バーチャル・コミュニティ通貨**という。

・隣近所が必ずしも親しいことが無い様にリアル・コミュニティがリアルに感じず、むしろネットのようなバーチャル・コミュニティに親密さを感じてしまう。

　　※ネットには匿名的世界が存在するため一概には言えず、逆に倫理観や規範を欠くことが多いので信頼は生まれにくい。

　・バーチャル・コミュニティでは物理的に離れたところにいて直接的な接触や面識が無くても、リアル・コミュニティ以上に参加者の本質的なアイデンティティを表現しており、そこに参加できなく出来なくなれば、個人は自己喪失感や疎隔感を覚える為信頼が自発的に生まれやすい。

1. **環境保護活動に活用するには**

『狭義の地域通貨の観点から』

　・地域内モノやサービスの交換に使用されることによって域内取引を活性化する。

　→従来、域外へ流出していた貨幣を地域内で流通させることで地域経済の自律性を高める。

　→他の地域との間で行われてきた余分なエネルギー流や物流を抑え、域外への輸送に必要なエネルギー消費や温暖化ガス排出量を減らし、さらには不必要な広告や過大な梱包を削減できる。

　→いわゆる**地産地消**

『広義の地域通貨の観点から』

　・文化メディアとしてさらにシンボリックな働きをする。

　→地球環境問題を深刻に受け止め循環型経済を目指す人が4Ｒをモットーとして、仮に地域通貨Ｒeを形成したとする。

　→Reの参加者はエコロジカルな生産や消費を行い、有機農法やスローフードに取り組むことが予想される。さらに、アグリビジネスと結びついた農薬使用、遺伝子組み換えに反対するであろう。

　→Reではこのような価値観や理念に合致したモノやサービスが取引される。

　・Reの取引高や残高の一部は環境問題の調査や循環型社会建設の為の社会的投資などへの寄付が可能

　・Reの理念に賛同した企業は自らが販売・提供する製品やサービスへの代価の一部としてReを受け取り、それを環境保全プロジェクトへの助成金として拠出することを求められる。

　・結果Reの参加者が増加するにつれて、この通貨の流通圏はグローバルに拡大する。

1. **今後どう発展していくのか**

・地域通貨はほとんどが紙幣方式か口座方式であるが、地域通貨をネットワーク型もしくはICカード型の電子マネーへ応用する実験が行われている。

→コミュニティもバーチャルな性格を持つものが増えてくると予想される。

→つまり、リアル・コミュニティを基盤とする小規模な地域通貨のみならず、バーチャル・コミュニティを基盤とする大規模な地域通貨が増加するということである。

　・仮に地域通貨の為のプラットホームがインターネット上に形成されたとする。

　→地域通貨サービスを提供するポータルサイトに行って、システムを初期設定すれば誰でも気軽にLETSを始めることが出来るようになり、普及していくと考えられる。

　→地域通貨の起動・運営・管理等のコストを引き下げる為、その数や種類は増加するという予想が可能。

　→1つのポータルサイトに労働にリンクするもの、赤字の上限を設けないものなど様々な仕組みのLETSが登場するであろう。

　　また、関心系・地域系・階層系などを特徴とするLETSが形成されるであろう。

　→参加者は自分に合ったLETSに加入すれば良い。

　→**マルチLETS**

・各個人が数枚のクレジットカードを所有しているように、様々なLETSに加入することになる。

　→どんな種類のLETSに参加しているかが、その個人の個性を表現することになる。

　→マルチLETSはコミュニケーション・メディアとしての地域通貨の特性を高めることが可能。

　・イギリスのLETS LINK UKは、1991年以来LETS組織団体としてイギリス国内のLETSの起動支援やLETS間のネットワーク化、相互連絡・調整を行ってきた。また、あるLETSにおける地域通貨を他のLETSと交換出来るようにした。

　→このように、複数の地域通貨が互いに連結し、広域の地域通貨になるというケースはアルゼンチンのRGTにもみられる。

→①地域通貨の多数化と多様化。

②地域通貨の電子マネー化とコミュニティのバーチャル化。

③地域通貨の多数化・多様化・多層化による個人の複数地域通貨への多元的帰属。

④地域通貨のネットワーク化や広域化が起こる。(どの順番で起こるかは未知)

1. **いくつもの地域通貨に参加するということ**

・地域通貨は国家通貨に対するもう一つの貨幣であるだけではなく、複数化・多層化することが分かった。

　→地理的な地域の違い、価値観や関心の違いに応じて様々な地域通貨が存在して良い。

　・日本国内では円を使用しているが、地域通貨の場合１人が１つの地域通貨にしか参加できないということはない。

　→様々なモノを選んで参加する様になれば、自分の個性を複数の地域通貨によって表現可能になるし、それぞれのコミュニティで自分の違った側面を開示することが出来る。

　→特定の地域に浸かったり、付き合いやしがらみにとらわれたりすることなく、多元的でオープンなネットワークを作れるだろう。

1. **地域通貨は出発点**

・地域通貨によって世界が一挙に変わることを期待しない方が良い。

　・地域通貨が私たちの生活の様々な側面に浸透していけば、企業や自治体といった従来の組織体系が変わるだけでなく人々の意識や行動が変わる。

　・現金と地域通貨のミックスで代金を支払っていくことは、私たちに地域通貨の使い道を考えさせ、ひいては国家通貨のあり方を考え直させることになる。

1. **感想**

地域通貨は経済的な自立や活性化を実現する為に考えられたモノだと思っていたが、実際の目的はそれだけではなく、コミュニティに様々な形で繋がる個人や団体が協力して社会的なシステムを構築していくものであるということが分かった。

参考文献

西部忠(2002)『地域通貨を知ろう』、岩波書店。